



作・ゆうづき

発行・優月鉄道管理局

## INTRODUCTION

夕刻から降り始めた雨は、22時をまわって一層強さを増し、大き目の傘を持っていても、足下がびしょ濡れになる。

一人きりの残業を終え、職場のビルを出

ゆふはやと  
た由布隼人は雨の中を小走りに、駅へ降りる地下街の階段へ急いだ。

「この分じゃ土日雨かな...まあ明日もどうせ仕事だけだ」

雨で地上の人通りが少ない分、地下街は混雑していた。もっとも特に天気に関係なく、金曜の夜は週末を迎える開放感にあふれ、どこへ行ってもいつもにぎやかなのが常だ。

しかし、今日は何か変だ。

郊外へ向かう電車が発着する地下のターミナル駅は、異様な緊張につつまれている。

いやな予感がした。この緊張は...

「...北都電鉄本線は、新佐倉駅構内で起きた人身事故のため、ただいま運転を見合わせております...」

喧騒の中、アナウンスが何度も繰り返される。改札前には運転再開を待つ人ばかり。家族や知人に迎えを頼むのか、携帯で連絡をとる人たち。

「やっぱり」

あまり当たって欲しくない予想が的中し、隼人はため息をついた。この構内の緊張感、事故や大雪など、何らかのトラブルで電車が止まっている時のものだ。

新佐倉は、隼人が降りる駅である。人身事故は年数回起きるが、自分が利用する駅では多分初めてではないだろうか。

それはさておき、困ったことになった。

「いつになったら動くのか、分からないのか?」

初老の男が苛立ちを抑えながら、駅員に尋ねる。

「申し訳ありません、電車の方は今しばらくは...でも、もうすぐ代行バスの準備ができますので、お急ぎの方はそちらの方へどうぞ」

駅員がバスターミナルの方向を指差す。ほぼ同時に、放送が構内に流れた。

「新佐倉、鳥戸方面へ向かわれる方は、代行バスを運行しますのでご利用ください。途中の各駅を経由します。定期券、回数券をお持ちの方は、そのままご乗車いただけます。それ以外の方は...」

やれやれといった表情で、改札前に固まっていた人の一部が動き出す。

さて、どうしようか。明日もいつもの通り仕事だし、この時間から帰っても寝るだけだ。時々そうするように、今夜はいつものこと、カプセルホテルかサウナで一晩過ごしてもいい...いや待てよ、明日のクライアントとの打ち合わせに必要な資料は、このあいだ自宅で作り、フロッピーも置いたままだ。

「仕方ない、帰るか」

列に並ぶ覚悟を決め、隼人は同じくバスを目指す人の波に混ざって地下街を歩き始めた。

地下街の途中にトイレがある。

この分だと、すぐにバスに乗れるとは限らないし、乗れても混雑する市街地、しか

も週末で大雨とあっては、渋滞に巻き込まれていつ帰り着くか分からない。今のうちに済ませておこう...

用を足し、ついでに顔を洗って出る。

「おや？」

さっきまで、地下街の中を延々と、代行バスの乗り場へ続いていたはずの人の流れがすっかり途絶え、あたりは妙な静けさにつつまれている。

変だなと思いながらも、表示の矢印に従って出口の階段を目指す。

ようやく「バスのりば」の表示が掲げられた階段にたどりついたが、やはり、あたりに人影はない。

階段を上がり地上に出ると、冷たい風が一瞬、ひゅうっと頭のとっぺんを吹きぬけた。

「あ」

空を見上げてちょっと驚いた。さっきまでの土砂降りがすっかり止んでいるばかりか、雲ひとつない澄んだ空、その真ん中から満月が、眩しいくらいの鋭い光であたり一面を照らしている。

深呼吸してあたりを見渡す。それほど高くないビルに囲まれた小さなロータリー、中央の植え込みの真ん中に背の高い水銀燈が一本。その向こうにバス停が見える。並んでいるのはたった3人だ。

周辺には商店もホテルも何もない。バス停の3人以外に人影もない。

「こんな場所があったのか」

慌しい日々ではあるが、それでも通勤で通り過ぎるだけの駅、という訳ではない。隼人にとっては職場の最寄り駅ということで、仲間と周辺を飲み歩いたり、地下街で夕食をとり、ついでに近くのショッピングモールをうろついて帰ることもよくある。駅周辺にどんな店があったり、どこの階段

を上がったらどんな風景、ということはそれなりに知っていたはずだった。

しかし、この街並みには見覚えがない。ここは、どこだろう。

そんなことを考えていると...

“フォオン”

大型車によくある低いクラクションが聞こえ、ヘッドライトが近づいてきた。

「あ、まずい」

せっかく来たのに、ぼんやりしていると乗り遅れてしまう。駆け足で急ぐ隼人の横をバスは通り過ぎ、ロータリーの向こうのバス停に止まった。

車体の中央にあるドアが開き、一人の女性が降りてドアの横に立った。

こんな路線バスにガイドが乗っているのだろうか？ それでも待っていた3人の乗客は気にすることもなく、そそくさと乗り込んでいく。

バスは走ってくる隼人を待ってくれた。

「ありがとう」

やっとバスの前まで来て、隼人はまた驚いた。

ガイドかと思っていた女性は、まだ子供と言っている少女だった。せいぜい10歳くらいだろうか。

それに、バス自体も今時あまり見かけない、やや古びたデザインの車だ。

少女は大きな瞳で隼人を見上げて言った。

「こんばんは...すぐ発車します。お乗りになりますか？」

「あ、はい」

ゆっくり考える暇などない。隼人は思わずステップに足をかけ、乗り込んでしまっていた。

車内には、さっきの3人のほかにも、前の停留所から乗っていたらしい乗客も含め、すでに5人が乗車していた。

少女はもう一度バスの前後を見て、誰もいないことを確認すると、車内に入り運転手に向かって手を挙げる。

「2005年、オーライ」

え、2005年だって？

確かに今が2005年であることに間違いはないが、普通、バスのアナウンスで聞くようなセリフではない。

それでも何事もなかったように、ピーツというブザーとともにドアが閉まり、バスはゆっくり動き出した。

「とりあえず乗れてよかった。でも思ったより空いてるなあ」

車内を見渡して隼人は思った。たった5人の乗客は、思い思いの場所に散らばってシートに腰を下ろしている。

何とか無事に帰れそうだが、それはいいのだが...それにしてもさっきの、駅からバスターミナルを目指して歩いていたあの行列はどうしたんだろう。自分がトイレに立ち寄ったのはほんの僅かな時間だったと思うが、その間にすでに先に出たバスがあって、みんなそれに乗って行ったんだろうか。

それに道路の空き具合も、いつもの週末ならこんなにスイスイと車が走れるはずなのに、このバスはまったくストレスを感じさせないスムーズな走りっぷりだ。

しばらくして、乗車ドアの直後の席にちょこんと座っていた少女が立ち上がり、マイクを手にとって喋り始めた。

「あの子がバスガイド、いや車掌だったのか」

今時バスに車掌、しかもあんな子供が...さっきからどうも妙だ。急変した空模様、見たことのない風景、そして、どこか不思議な雰囲気漂わせるバス。

いったいこれは何なんだろう？

その少女のアナウンスは、隼人の頭をさらに混乱に陥れた。

「2005年からご乗車の皆さん、お待ちせしました。このバスは時空乗合・1970年行きです。停留所は1年ごと、ご希望のところで停車しますので、お降りの方はお近くのボタンでお知らせください。お知らせのない停留所は通過します。次は、2004年です」

時空乗合？

1970年行き？

本気で言っているのだろうか。いやまさか。だとしたら何だ？何かのイベントか？映画かドラマのロケにでも紛れ込んでしまったのか？

「運転手は、<sup>ときみ</sup>刻海営業所の<sup>にじみやこうせい</sup>虹宮晃星、

<sup>みおり</sup>車掌はわたし、虹宮実緒梨です。終点までご案内します。よろしくお願ひします。

では、ただいまから乗車券を拝見します」  
実緒梨と名乗った車掌の少女は、車の一番前に立ってそう言うと、順に1人ずつ乗客のチケットを確認し始めた。

ゆれる車内をゆっくり歩きながら、5人の乗客、それぞれの横へ行って、淡々と確認作業をこなしていく。

「乗車券を拝見します」

隼人の順番になった。言葉は丁寧だが、どうも喋り方や動作にあまり感情らしきものがない。初めて会う者に対する、子供らしい礼儀正しさと言えなくもないが...そんな実緒梨が、じっと隼人を見つめる。

「あの、駅の放送で、代行バスは定期で乗っていいって言ってたんで...でもこれ違う車みたいですね。すいません、降りますんで、そのへんで停めてもらえますか？」

落ち着いてこれだけ言うのが精一杯だ。

との方が気になる隼人であった。

「ちょっと待っていてくださいね」

実緒梨はそう言うと、運転席の横へ駆け寄って、何やら小声で相談していた。やがて、運転手の晃星が車内のマイクを通じて言った。

「お客さん、申し訳ないがちょっともう、時空トンネルに入ってしまったし、悪いですが他のお客さんがみんな降りるまで、しばらくお付き合い願えませんか。後でちゃんと元の場所へお送りしますんで、ひとつ」

実緒梨も再び隼人のそばへ来て、

「ごめんなさい」

と頭を下げた。

「いや、俺がちゃんと見ないで乗ったのが悪いんだし、君のせいじゃないよ」

それはそうと、時空トンネル？

窓の外は、いつの間にか夜の暗闇とはまた違った、漆黒の空間に変わり、バスはその中をひた走っていた。時折、稲妻や渦巻きのような光が、近づいたり遠ざかったり。それはまるで、遊園地のアトラクションのようであった。

「時空トンネル走行中は、窓から手や顔を出さないように願います。もし時空間に転落したら、時の流れに飲み込まれて帰って来れなくなりますので」

晃星がまた、マイクを通じて車内にそんなことを話しかける。

わずか数十分の間のあまりに激しい展開の中で、隼人はもう、目の前の出来事を不思議なくらい、冷静に受け止められるようになっていた。

運転手の晃星が言う時空トンネルなるものが本物なのか、やっぱり何かの芝居に過ぎないのかといったことより、後でちゃんと元の場所に帰ってくれるとは言ったが、いったい何時になるのだろうか、そんなこ

## 第一部

「2000年、通過します」

「1995年、通過します」

実緒梨は1年ごとに、丁寧にアナウンスを繰り返す。しかし今のところ、誰も降りない。

確か行き先は1970年と言ってたけど、どれくらい時間がかかるんだろうか？

と言うか、あのロータリーの停留所を出てから、どれくらい経ったのだろう。時間をさかのぼるといふ未知の体験の中で、実際の経過時間という感覚が麻痺しているのを、隼人は感じた。

やがて、

“ピンポン”

初めてボタンを押した客がいた。

「1987年、願います」

実緒梨はそう言いながら、ブザーを鳴らして晃星に合図を送る。

確認した晃星も、ビービーと2回ブザーを鳴らし、「了解」の合図を実緒梨に返した。

ややあって、バスはクラクションを鳴らしてトンネルを抜け、ほの明るい空の下、高速道らしき道を走っていた。まだ夜明け前、という感じだろうか。

やがて、パーキングエリアの中にある高速バスの停留所に入ると、「時空乗合」は18年ぶり?に停車した。

降りたのは、40代くらいの中年女性だった。運転手の晃星と少しのやり取りの後、丁寧に頭を下げると、どこへともなく去っていった。

「30分休憩いたします」

晃星はそう車内に呼びかけると、運転席を立ち、車外へ出てフロントガラスを拭き

始めた。

実緒梨は車体の前方にある、降車ドアの外に立った。

せっかくなので隼人も外へ出てみた。

「発車時間までにお戻りください」

例によって、生真面目な表情で呼びかける彼女に、隼人は笑顔で「わかった」と答えた。

あらためてバスを見る。いわゆるボンネットバスほどのレトロ感ではないが、角の丸い、リベットが多用されたボディは20世紀、高度成長期の雰囲気だ。隼人が子供の頃は、こんなバスがまだ現役で走っていた。そういう意味では懐かしさも覚える。

「一応、最終目的地の時代より、少し前の時代に合わせたデザインになってるんだよ。その時点でまだ存在しなかったはずの物があると、辻褄が合わないことになって、何かとやっかいだからね」

窓を拭きながら晃星が話しかける。

「はあ」

納得はするが、そういうレベルの問題でもないような...

それはそうと、本当にここは1987年なのだろうか？

隼人はサービスエリアの方へ行ってみた。時計の針は午前6時。24時間営業の食堂や売店では、長距離のトラックドライバーたちがくつろいでいる。公衆電話コーナーには、緑色のカード電話がずらりと並び、一部には行列すらできている。携帯電話はまだ無い、というか、自動車電話などのごく限られた存在に過ぎず、一般には普及していない時代だ。

売店に入る。缶コーヒーやジュースが並び棚、しかしペットボトルは見当たらない。

そうだ、新聞を買ってみよう。手前のひとつを取り、ついでに缶コーヒーも一緒に差し出す。

「お客さん、これは何ですか？」

代金を受け取った店員が、怪訝そうな顔つきで隼人を見る。

「何って、千円...あっ」

あわてて、出した千円札を引っ込め、財布の中から100円玉を、製造年を見ながら慎重に3枚選んで渡しなおした。

「あぶないあぶない、この時代にはまだ、この札は出回っていないんだ。ニセ札犯か何かと誤解されないといいけど」

外のベンチに腰掛けて新聞を開く。

“いよいよ国鉄分割民営化、4月から6つの旅客会社と1つの貨物会社に...”

“53年間に及ぶ南極捕鯨が終了”

出ている記事は、まぎれもない、1987年当時のものだった。

しかし、こんなことであるのか。

ここへ来てもまだ、自分の身に起こっていることを、完全には信じられない隼人。

「発車しまーす」

実緒梨が手を振りながら呼んでいる。コーヒーを飲み干した缶をゴミ箱に捨てると、隼人はバスへ駆け戻った。

その後、1985年、1983年、1978年、そして1975年と、隼人以外の5人の乗客は、それぞれ希望する年でバスを止め、順に降りていった。

男性2人と女性3人。年齢は30代くらいから50代くらいまでと、見たところ5人の乗客に、何か共通点があるようには思えない。

自分は全く偶然だったが、正式にこのバスに乗るためには、どんな手順が必要なのだろうか？

運賃は？

そもそも、過去に戻ろうとする理由は？

他の乗客たちに、いろいろ訊ねてみたいと思ったものの、なんだかそれもためらわれて、隼人はひとり静かに、戻り行く時代の風景をみつめていた。

最後、1975年に降りていったのは、40代くらいの男性だった。

彼は降りる際、晃星にこう声をかけた。

「ありがとう、これであいつを助けられるよ、本当にありがとう」

その男性は、少し泣いているようにも見えた。

「お帰りは1週間後です。お忘れにならないように」

そう言ってドアを閉め、晃星はバスを発車させる。男性は深くと頭を下げ、いつまでもバスを見送っていた。

これで、乗客は隼人だけになった。もう、このバスの終点である1970年に用がある者はいないわけだが、そこは公共交通。予定通り走らねばならない。何よりも、1970年の停留所には、未来への帰還を希望する乗客が待っているかもしれないのだから。

「終点、1970年到着です」

バスが止まると、実緒梨はそう言って降車ドアを開け、外に立った。

1970年の停留所は、都市の郊外、宅地化の波が押し寄せつつあるが、一方で森や田畑といった自然の風景も普通に見られる、そんな場所にあった。

ちょうど、都心から伸びる私鉄の途中駅からバスに乗り換えた、その終点といった

趣だ。実際、隼人が乗ってきた時空乗合のすぐ近くに、地元の路線バスと思われる車両が1台停車している。しかし、運転手も乗客もいない。まだ始発前らしく、前夜から停泊しているのだろう。

隼人はバスを降りて、その田舎のバスターミナルを一周してみた。

待合室に掲げられた時計は、ここでも午前6時を指していた。どうやら、時空乗合は乗車は夜、到着は朝と決まっているようだ。

時計の横に掲げられた日めくりカレンダーを見る。

1970(昭和45)年7月1日。

青い空、緑の木々、暑い陽射し、鳴き出すセミの声...

35年前の日本の、どこでも見られた田園風景。

「なんか、懐かしい風景だなあ」

そこは隼人が生まれ育った、小さな地方の街に似ていた。

バスはいったん時空トンネルに戻り、同じ日の、約15時間先の夜、同じ場所にやってきた。

しかし、どうやら今回は未来へ帰ろうとする乗客はいないらしい。誰も乗らないまま、バスはふたたび夜道を走り出した。

「じゃあ、これから2005年に戻りますからね」

ここから先、休憩を除いては2005年までノンストップで行く、と晃星は言った。

郊外から都心へ入る。市街地を抜ける都市高速の脇には、さまざまな広告のネオンサインがあふれる。

朝に見た、自然の山や田畑の風景は今も昔もあまり変わらないが、こういった人工

のデザインを見ると、ちょうど古い映画を見たときのような感覚を覚える。書体や装飾がどこもなく古めかしく、時代が感じられるなあ、と隼人は感心していた。

そんな時、ふと何か思い出したように、実緒梨が晃星の脇に駆け寄った。

「どうした？」

「...万博を、見たいの」

「万博？」

万博...そうだ、いま走っている1970年といえば、大阪万博が開催された年だ、と隼人は思い出した。

子供の頃、父親から、パピリオンを回って集めたというスタンプ帳を見せてもらった覚えがある。

高度成長期、伸びゆく技術と輝かしい未来を高らかにうたった大阪万博は、当時の人々に大きな関心をもって受け入れられ、その熱い日々は、もはや伝説と化している。

「うーん、でも今日はまだお客さんがいるし、早く元の時代にお送りしないといけないから、また今度にしよう」

晃星は実緒梨に言い聞かせる。

「あの...俺ならいいですよ、多少遅くなくても」

どうせ帰り着く時間は一緒だ。

それより、これまでずっと、おとなしく仕事をこなしていた実緒梨が、珍しく自分の希望を言っている。多少の事なら聞いてやりたい、それで彼女が少しでも喜ぶなら、という気持ちから隼人は言った。

「お客さん、ありがとう...でもやっぱり今日はやめておこう。僕らはこのバスに乗っていれば、何度でも来られるんだから、な、実緒梨」

そう返す晃星に、ちょっと残念そうな表情を見せたような気もするが、やっぱり元のポーカークフェイスのまま、実緒梨は何も



言わず、乗車ドアの後ろの自分の席に戻った。

そうしているうち、バスはまた、暗い時空トンネルに入っていた。

「どうぞ」

気がつくと実緒梨が横に立っていた。両手に乗せたキャラメルを隼人に差し出す。

「ありがとう、貰うよ」

一つを手に取り、包み紙を解いて口に入れる。何の変哲も無い、どこでも売っていきそうなキャラメル。でもこれはいつの時代に作られたお菓子なんだろう...そんなことを考えながら包み紙を見ているうち、ふと思いついた。

「ねえ、ちょっと見ててよ」

隼人は実緒梨に声をかけた。

4センチ四方くらいのその小さな紙を、指先で操る隼人。不思議そうに見つめる実緒梨。

「ほら」

やがて隼人が手をひらくと、小さな折鶴が出来上がっていた。

「わあ!!」

小さな驚きの声とともに、実緒梨の表情がゆるんだ。ほんの少しだが、彼女が隼人に初めて見せた笑顔。

隼人からもらった折鶴を、晃星に見せに行く実緒梨。

「ほう、器用なもんですね」

実緒梨はまたキャラメルを持ってきた。

「あの...お兄さん、もっと作って」

「いいよ」

ちょっと恥ずかしそうに、でも楽しそうに、隼人の横に並んで座る実緒梨。

「こんな顔もするんだ...」

隼人がバスに乗って以来、ここへくるま

で、ほとんど喜怒哀楽の変化を見せなかった彼女。あまりに無表情だったので、未来からやって来たという事実も考え合わせるとひょっとして、ロボットとかアンドロイドとか、そういう種類のものなんじゃないだろうかとか、実際のところ隼人はそんな想像もしていた。でも、なんだか安心した。やっぱり普通の人間の女の子だ。

そう確認できたことが、なぜか嬉しくて、隼人は楽しそうに折り紙遊びを続けた。

「お兄さんは、帰りたい時代とか、ないですか?」

しばらくして、実緒梨が尋ねてきた。

「このバスなら、好きな時代に行けるよ」言われて、腕組みをして考える隼人。

「うーん、どうかな。あんまり思ったことないな」

小学生の頃を懐かしく思い出したり、ちょっとした失敗がいつまでも忘れられなかったり、そういったことが自分にもない訳ではない。しかし、わざわざその時代に帰ってまでどうこう、とは思わない。

「なんか、恥ずかしいんだよ、昔の話は」

「恥ずかしいの?」

「うん。なんであの時、あんな事言っちゃったんだろうとか、あんな事で友達とけんかしなくても良かったのにとか、あまり考えると本当に穴に入りたくなくなるくらいで。懐かしいというより、照れくさいんだよね...あ、晃星さんならきっとこういう気持ち、分かってもらえますよね」

隼人は少し大きな声になって、運転席の晃星に向かって話を振る。

「うん、そうだなあ...そうだよなあ...」

どこか神妙な面持ちで、前を向いたまま晃星は答えた。

「ふん」

なんだか難しくてよく分からない、という雰囲気の実緒梨。

「あ、でも、好きな人ができたら、昔の雄姿を見せたい、っていうのはあるかな。これでも俺、高校生の頃は剣道に熱中して、大会でもいい線まで行ってたんだよ」

「へえ、わたしも見たいな」

と、そんな話をしていた時  
“ウーウー”

サイレンの音が後方から近づいてくる。  
パトカーだ。警察？

真っ暗な時空トンネルの走行中。こんなところに警察の車が現れるなんて、どういう状況だろう。

迫ってきた2台のパトカーのうち1台がバスを追い越して、いきなり前へ回り込んだ。

「わっ」

あわててブレーキを踏む晃星。

「きゃっ!!」

急ブレーキと緊張した空気に怯え、実緒梨は隼人の右腕にぎゅっとしがみついた。

「大丈夫だよ」

隼人は実緒梨の手に自分の手を重ねながら、小さな声で励ます。

停まれ、の合図をするパトカーの後ろについてバスを走らせる晃星。

そして、2台のパトカーとバスは速度を落としながら時空トンネルを出て、小高い丘の上の道で停車した。

木々の緑がやわらかい陽差しと調和して美しい。どこからか鳥のさえずりも聴こえる、そんな昼下がり。ここは何年の世界だろう。

パトカーを降りた警官がバスに乗り込ん

でくる。

「時空乗合、908系統車ですね」

「はい」

「時空警察です。免許証と運行許可証を拝見します」

晃星は求められるままに書類を見せる。

「今日は、乗客は2人ですか」

車内を見渡し、警官が尋ねる。

「いえ、男性1人です。女の子の方は車掌です」

「乗合バスはワンマン運転のはずでは？」

「ええ、でもうちの会社では運転手の判断で、車掌やガイドを雇って助手として乗せていいことになってます。賃金は運転手の負担で。まあ私設秘書みたいなものです。会社に確認してもらってもいいですよ」

子供の実緒梨がこうして車掌として乗っているのは、そういうことだったのか、と隼人も納得した。

そのうち、別な2人の警官が乗り込んできて車内をまわり、座席の下や荷棚を調べ始める。うち1人が、実緒梨に近寄り手を向けた。

「あなたが車掌さんですね、では乗客記録を見せてください」

実緒梨はおずおずと、鞆から小さな記録帳を差し出した。

ぱらぱらと見終わると、今度は隼人に向かって尋ねた。

「失礼ですが、どちらから？」

「2005年です。1970年の大阪万博の様子を見て、もとの時代へ帰るところです」

「1970年での滞在時間は？」

「えーと、朝着いて、夜出発で、15時間くらいだったかな」

あくまでも冷静に、疑われないようにと、精一杯の演技をしたつもりの隼人だった。

警官たちは後はもう、隼人には何も言わ

ず、運転席の方へ歩いていった。そして何かメモを取りながら、晃星に向かって話した。

「タイムトリップ事業は、あくまでも一過性の観光目的に限定して認可されている。滞在型の旅行は認められていない。そのことはご存知ですね」

「ええ」

「このところ、一部の事業者が、過去の世界に旅行した人を、そのまましばらくその時代に置いてきて、あとで迎えに行くという違法な営業をしているという、匿名の報告が入りましてね、こうして抜き打ちで調査させてもらってます」

「そうでしたか」

「どうも失礼しました。でも違法行為のないよう、くれぐれもお願いします」

「お疲れ様です」

そして警官たちはパトカーへ戻り、そのまま去っていった。

トンネルへ戻ろうと、ハンドルを大きく切りながら晃星が言う。

「お客さん悪かったね。でも助かったよ、お客さんが飲み込みの早い人で」

「まあね」

営業マンとして、クライアントの言おうとすることを先読みする能力には自信があるつもりだ。隼人は実緒梨の方を見て、ちょっと自慢げに胸を張って見せた。実緒梨も嬉しそうに微笑んだ。

しかし、これまでに降りていった5人の乗客たちを見ていた隼人は、すでに気づいていた。このバスが、まさにあの警官が言った通りの、違法営業をしているらしいことを。気づいたからこそ、あんな芝居をしてフォローしたわけであり。

「でも、事情が分からない俺が言うのも何なんですけど、つまり、こういうのって何というか、まずいんじゃないですか...ほら、よく言うじゃないですか、過去を変えるってことは、結局、未来に...」

そんなに SF 小説や映画が特に好きなわけではないが、こういう物語のお約束な設定でよく聞くのが、

“過去の事象に介入してはならない”

というものだ。過去を変えることは、すなわち未来を変えることにつながり、自分だけでなく、他の人々や社会の動きにまで影響を及ぼす。時には歴史を変えるようなことにもなりかねない。そして自分に都合よく過去をいじった結果は、いずれ自分に跳ね返ってくる。

運転しながら、晃星が答える。

「あんたの言いたいことはだいたい想像がつくよ。でも、もともと僕らの人生なんて、歴史なんて、曲がり角があったら右へ行くか左へ行くか。階段があったら上るか下りるか。そんな小さな、偶然の選択が連続した結果に過ぎない。そう思わないか？」

「まあ、そうですね」

隼人だって、今のこの姿...どこにでもいる勤め人で、数年前の転職がきっかけで一人暮らしで、今のところ独身で...は、これまでの人生のさまざまな場面で、いろいろな選択をしてきた結果である。迷った時にもう一方の道を選んでいたら、また違った姿があったかもしれない。

だいたい、今回こうして不思議なバスの乗客となったのも、電車が人身事故で止まり、代行バスに乗るつもりが、なぜかこうなってしまった。ホテルに泊まるという選択をしていたら、ここにはいなかったかもしれない。

「自分が歴史を変えてやるんだとか、鬱

陶しい奴を消したいとか、そんなのはさすがにお断りするよ。でも、過去につらい後悔をしたことがあったり、やり残してきた事にいつまでも心をさいなまれている人が、このバスに乗って少しでも楽になれるなら、それでいいじゃないかって思うのさ。神様だってそれくらい、きっと許してくれるよ」

バスは長いトンネルを抜け、ようやく2005年へと戻ってきた。

1970年の古めかしさとは違う、見慣れた夜の街の風景。

「お客さん、電車が止まってるんだろう？ どうせだからあんたの家の近くまで行ってやるよ」

「すみません」

郊外のベッドタウンへ続く幹線道を走る。雨は幸い、小降りになりつつあった。

そして、住宅街の公園の横にバスは停まった。

「長々とつき合わせてしまって悪かったね」

「いえ、こちらこそ、家の近くまで送ってもらってありがとう」

運転席の晃星に礼を言い、バスのステップを降りると、今度はドアの横に立つ実緒梨の方を向いた。

「じゃあ、元気でね」

「さよなら、お兄さん」

寂しそうに実緒梨が言った。

その時、サイドブレーキをかけて晃星が運転席から降りてくると、

「ちょっとこっちへ」

と、隼人の手を取り、実緒梨には見えないうバスの反対側へと引っ張っていった。

「どうしたんですか？」

「ひとつ、頼みがあるんだ」

「何でしょうか？」

「近いうちに、もう一度だけ、実緒梨につき合ってやってもらえないか？」

「あの子と？」

「あいつ、こうやって僕の仕事を手伝わせるようになって、もうすぐ1年なんだが、笑顔なんて、一度も見たことなかった。それが今日、あんたと一緒に話してるときの、楽しそうな顔。あんな嬉しそうな実緒梨を見たのは初めてだよ。

もう少しで僕も定年で、あいつと一緒に仕事するのもそれまでだ。せめて最後に楽しい思い出を、ひとつでも作ってやりたいんだ。それはどうやら僕には無理なんで、あんたの力を借りたいんだ。ちょっとの間だけでいい、会ってやってくれると有難いんだが」

真剣な晃星の表情を見ると嫌とは言えず、隼人は小さく頷きながら答えた。

「まあ、そのくらいなら...」

このバスに乗ってしまった時、正直、最初は生きて帰ってこれられないかも、という不安があった。しかしそれは杞憂だったわけで、こうして元の時代に戻ってきた。タイムマシンの技術は未来の世界で確立されている。そういう意味での心配はなさそうだ。

それに、何より隼人自身も、もう一度実緒梨の喜ぶ顔が見られるなら、それも悪くない、という気持ちのほうが強かった。

「ありがとう」

そう言って嬉しそうに手を強く握り、振り返ろうとするのを途中でやめて、晃星はさらに訊ねた。

「そうだ、名前、まだ聞いてなかったね」

「由布...由布隼人です」

「隼人君か、じゃあ、そのうちにまた、迎えに来るから」

晃星は運転席に戻り、実緒梨に声をかける。

「じゃあ、発車するぞ」

「...はい」

ステップに立って彼女が手を挙げる。

「2005年、オーライ」

ボタンとドアが閉まる。

フォン、とあいさつ代わりにクラクションを鳴らし、バスは動き出した。

「さようなら」

窓を開けて顔を出し、実緒梨が手を振る。

「さようなら」

隼人も笑顔で手を振る。

やがてバスは国道へ通じる角を曲がり、見えなくなった。

不思議な余韻に浸りながら、隼人は腕時計を見た。

23時30分。雨の中を駅にたどり着いたあの時から、約1時間しか経っていなかった。

「夢でも、見てたのかな」

自分は、本当は代行バスに乗って新佐倉の駅までたどり着き、ここまで歩いて帰ってきただけなんじゃないだろうか？

ふと、そんなことを思った。

しかし次の瞬間、ポケットから出した、実緒梨と一緒に作った折鶴が、あの時間が夢ではなかったことを物語っていた。

## 第二部

「北都電鉄本線は11日午後8時頃、新佐倉駅で発生した人身事故の影響により、全線で運転を見合わせていましたが、12日は始発から平常どおり運転しています...」

いつものように、起きてすぐにテレビのスイッチを入れる。早朝のニュース番組が、淡々とそんな状況を伝える。

野菜ジュースとバナナの朝食を済ませ、あわただしく身支度をする、隼人はマンションの部屋を出て、駅への道を歩き始めた。

昨夜の大雨は上がっているが、すっきりしない、どんよりした曇り空。

いつもの平日の出勤時と同じ時間帯だが、やはり土曜日ということで、駅の混雑は控えめだ。

改札からホームへの階段を降りようとした隼人は、ふと、その上に掲げてある文字を見て、足を止めた。

“成功させよう 愛・地球博 3月25日開幕”

2005年、日本で開催される万国博覧会をPRする広告。

毎日見ていたはずなのに、今まであまり意識することのなかった、そんな広告の文字が、今日はやけに気になる。

「万博か...万博...あっ」

昨夜の出来事。タイムトリップするというバスに乗って、たどり着いた1970年で、あの子は確か、万博が見たいって言った。

「...実緒梨...ちゃん」

夢じゃない。

あらためてポケットから定期入れを取り出す。カード類をはさむ透明なホルダーに

折りたたんで入れた、キャラメルのおもひ紙の折鶴。

やっぱり、夢じゃない。

そうは思いながらも、こんな事ってあるんだろうか...やはり何かの大芝居に紛れ込んだだけなのか、とも思う。

もやもやした気持ちのまま、ゆっくりと階段を降り、ホームにたどりついた。

昨日、ここであつたはずの人身事故の痕跡など、なにも感じさせない、いつもの風景。ここで、人が命を落としたという事実は間違いないはずなのに、あまりに普通すぎる、いつもと同じ風景。

伝えられている情報は、ただ人身事故とだけで、それ以上のことは何も分からないし、誰も訊こうとしない...

やがて入ってきた電車に乗り込み、隼人は職場へと向かった。

何も変わらないまま、数日が経過した。

「そのうち、迎えに来るから」

別れ際に、晃星は隼人にそう言った。しかし、今度はどんなタイミングで、どうやって自分のところへやって来るのだろう。

そんなことを考えながら、退社後の夜の街を歩いていた。その時、

「あ、あれは」

駅前のビルの壁に設けられた大きなビジョンに流れるニュースに、隼人は立ち止まった。

“1970年の大阪万博以来、日本で35年ぶりの総合博となる、2005年日本国際博覧会「愛知万博、愛・地球博」が25日午

前、幕を開けました...”

時計のカレンダーを見る。3月25日。

「そうか、今日だったのか」

思わずつぶやき、しばらくその画面を見上げていた隼人の頭に、ふと、実緒梨の顔が浮かんだ。

“今日かもしれない”

突然、そんな連想が働いた。そしてなぜかその思いに対して、自分でも不思議なくらい、根拠のない自信が徐々に膨らんできた。

意を決し、地下街へと降りていく。今日がその日だとしたら、あの日、あのバスと出会った広場へ続く階段が、また自分の目の前に現れるはずだ。

歩いていると、地下街の途中に屋台があった。そこには、さっきニュースで見た、愛知万博のキャラクターグッズが並べられている。

その前で立ち止まった隼人は、緑色のキャラクターがついた小さなぬいぐるみキーホルダーをひとつ、手に取っていた。

「これ、下さい」

実緒梨へのささやかなプレゼントのつもりだった。

それにしても、あの時の出口の階段はどこだっただろう。そう考えながら、なおも地下街を歩く隼人。

「そうだ」

ふと思い立ち、少し先に見えるトイレに入る。

鏡の前に立ち、カバンからネクタイを取り出し、シャツの襟に通した。

隼人の会社では、普段の勤務時の服装はある程度自由が許されている。よって隼人はスーツ姿の時も、窮屈なネクタイはほとんどつけていなかった。

しかし、今日はこれから、自分を待って

いる人に会うかも知れないのだ。その人... 実緒梨はまだ子供ではあるが、女の子はいくつであろうとレディに違いない。ここはこちらも服装を正すのが礼儀というものだろう。

鏡を見ながら、ついでに、髪に軽く櫛を入れる。

その瞬間、思い出した。

「あの日も確か、ここのトイレに立ち寄って...」

服装を整え、あわててそこを出ると、さっきまでの喧騒が嘘のように、無人の地下街が広がっていた。

同じだ。

確信を持って、隼人は出口の階段へと進んでいく。

「あっ...」

予想していたが、やはりあの時と同じだ。水銀燈に照らされた小さなロータリー、そしてバス停。

“フォオン”

そして今回も、あのクラクションとヘッドライトが近づいてきた。

バスが止まり、ドアが開く。

「こんばんは、隼人お兄さん」

少し照れたような表情とともに、実緒梨が隼人を見上げた。

いきなり名前呼びかけられて、ちょっと驚いたが、晃星が教えたのだろう。

「ああ、実緒梨ちゃん、こんばんは」

二週間ぶりの再会。

この日、一番に気付いたのは、実緒梨の髪型...前回会ったときは、後で2つに分けて括っていたが、今日はそれをほだき、前から見て右側だけを、耳の上の辺りでまとめ、星型のアクセサリーもついている。

「あ、今日は可愛いヘアスタイルだね」

すぐに気付いてもらえたのが嬉しくて、

実緒梨は満面の笑みを見せた。

「そりゃ、大事なデートだからな、気合も入るさ」

そこへ晃星も、バスから降りて隼人を迎えた。

「ありがとう隼人君、今日は済まないね」

「いえ」

「じゃあ、行こうか」

言われてバスに乗り込みながら隼人はやっぱりネクタイを締めてきてよかった、と改めて思った。

そして、夜の街を走り出すバス。

「実緒梨、今日は行きたいところがあるんだろう、さあ、隼人さんにちゃんとお願いいししないと」

晃星が実緒梨に言う。

「え、どこへ行きたいの？」

訊ねた隼人に、実緒梨は決心したように言った。

「隼人お兄さんの剣道の試合、見に行こう」

「俺の？ああ、この間会ったときに言った...あんなこと、覚えていたのか」

県立運動公園の敷地内にある、大きな体育館。

高校対抗剣道大会の看板が見える。

隼人は実緒梨と晃星を、2階の観覧席へ案内した。

隼人の高校時代...まだ、10年も経過していないが、それでもかつての同級生や、指導の先生たちがいるのを見つけ、思わず懐かしさも感じた。

そこから少し離れたところに三人で座る。

「よし、ちょうど始まるころだよ」

二人の選手が向かい合って一礼し、中央へと進む。

「顔が見えないね」

「面をかぶっているからなあ。名前はほら、お腹の下のところを書いてあるだろう」  
剣道の防具のひとつ、「垂」を指差しながら、隼人は説明する。

「あ、ほんとだ」

向かって右側の選手の垂のところに「西南佐倉学園 由布」の名前がみえた。

フロアの中央で二人の選手が向かい合う。「蹲踞(そんきょ)」という、腰を落とした姿勢で竹刀を構える。

「始め!」

審判の合図で立ち上がると、勢いよく竹刀を交える二人。ややあって今度は少し離れてにらみ合い、隙をうかがいながら、小手や胴を狙う。

緩急の連続に、息を呑む観客。

しばらくの合戦の後、一方の竹刀が相手の面を捉えた。

「面あり、一本!」

審判の声と大きな拍手。

「お兄さん、今のは...」

訊ねる実緒梨に、

「ああ、一本とられた、俺が」

気まずそうに答える隼人。

「おかしいなあ、この日の試合は確か、俺が先取して、そのまま一本勝ちだったよな...」

そう思っているうち、試合が再開される。緊張した取り組みが続く。そして、

「胴あり、一本!」

二本目も相手に決められてしまった隼人。

「勝負あり」

両側へ下がり、二人が礼をして試合が終わる。

「お兄さん、負けたの？」

隼人の顔を覗きこむ実緒梨。

「あ、ああ、負けた...うーん、こんなは



ずじゃ...俺が一本勝ちしたのは、この次の桃瀬高校との試合の時だったか」

頭に指を当てて、難しそうな顔の隼人。そんな隼人の姿を見ながら、実緒梨はくすくすと微笑んだ。

「カッコ悪いところ、見せちゃったなあ」  
試合会場を離れ、走り出したバスの中、隼人は頭を掻きながら言う。

「うん、カッコよかったよ、隼人お兄さん」

勝ち負けはともかく、隼人の試合ぶりを見られた実緒梨は、それだけで嬉しそうだ。

「ありがとう、なぐさめてくれて」

「今度は、隼人お兄さんの好きなところにつれて行って」

実緒梨は、隼人にそう言った。

「え、俺の好きなところ? そうだなあ」

隼人はしばらく腕組みしていたが、やがて、

「よし、じゃあ、万博へ行こう」

「え、万博!」

実緒梨の目が一瞬、輝いた。

芝生がきれいな、広い緑地。

敷地の真ん中に、バナナを半分に切ったような、独特の形状のモニュメント“太陽の塔”がそびえる。

ここは大阪の万博公園。1970年に開催された大阪万博の跡地が、記念公園として整備されたところだ。

暖かい陽射しの下、芝生の上にレジャーシートを広げている隼人たちの姿は、どこでも見かける、微笑ましい家族の風景のようだった。

「おおー」

実緒梨が持ってきた弁当箱のふたを開けると、隼人は思わず歓声を上げた。

真ん中に大きな目玉焼き。周りに色とりどりの野菜や果物が添えられている。

もう一箱には、不揃いながら、ごまや海苔など、一個ずつ工夫しただろうと思われるおにぎりが。

「こいつが作ったのは目玉焼きとおにぎりだけ、あとは缶詰とかばっかりだよ」

横から悪戯っぽく口を出す晃星に、むっとする実緒梨。

「いや、きれいに出来てるよ、この目玉焼き。じゃ、いただきます」

黄身が少し硬めで、ちょっと塩味も足りない。でも、

「うん、おいしい」

隼人の言葉に、実緒梨はとびっきりの笑顔を見せる。

「そうだ、これを」

ふと思い出し、隼人は上着のポケットから、小さな包みを取り出すと、実緒梨に渡した。

「お弁当のお礼には、ちょっと小さいけどね」

「何だろう、開けていい?」

頷く隼人の前、実緒梨の手のひらに現れたのは、地下街で買った愛知万博キャラクターのキーホルダー。

「わあ、かわいい」

「2005年にも愛知で、万博があるんだ。そのキャラクターだよ」

「ありがとう、大事にするね」

実緒梨はすぐ、それを自分のポシェットの紐に取り付けた。

その後、公園の木々や花を見て歩き、そして太陽の塔をはじめ名残の場所を回り、万博を楽しんだ三人であった。

青い空、白い雲。

過去というものは、往々にして色あせたカラー写真のようなイメージで語られたり、見せられたりするが、実際はこの青も白も、それこそ明治時代、江戸時代、戦国時代...とさかのぼっても、きっと変わることがないのだろう。

万博公園を出発し、バスは海沿いの道の脇に停まっていた。

楽しい時間はあっという間に過ぎる。

もう、夕陽が水平線に沈もうとしている。オレンジ色の光が細波に合わせて、水面にキラキラ輝いている。

帰る前に海が見たい、と言ったのは実緒梨なのだが、当の実緒梨は遊び疲れたのか、バスの後部座席で静かに寝息をたてていた。幸せそうな寝顔に安心して、薄い毛布を一枚かけてやると、隼人はバスの外へ出た。

晃星は一人で海を見つめていた。

「いいお嬢さんですね。あの目玉焼きもおいしかったし、あんなの毎朝作ってもらえたら幸せだろうな。晃星さんがうらやましいですよ」

堤防の縁石に並んで座る隼人と晃星。

「お嬢さんか...うん、ああ、そうだな...やっぱり、そうとしか見えないよなあ」

「え？」

どういう事だろう、不思議そうに問い直す隼人。晃星は海を見たまま、ゆっくり話を続けた。

「それにしても、実緒梨のあんなに楽しそうな姿を見られるなんて、あなたには感謝してるよ...僕にはついに最後まで、心を開いてはくれなかった。許してもらえないんだなあ、やっぱり」

黙って晃星の方を見る隼人。

「あなたには、随分世話になった。つき

合いついでに、ひとつ聞いてくれるか、僕たちのこと」

よく分からないが、深刻そうな雰囲気を感じた隼人は、何も言わず頷いた。

「あいつは...実緒梨は、僕の妹なんだ」

「い、いもうと!？」

さすがに驚いて、ちょっと大声になってしまう。

確かに今どきの家族の形はいろいろだ。古い常識が全てではない。人知れぬ事情もあるだろう。

なにより、ふたりの関係が父と娘か、あるいは祖父と孫だろうというのは、これまでの様子を見ていた隼人の勝手な憶測に過ぎず、本人たちから聞いたわけではない。しかしそれにしても、やっぱりどう考えても不自然な話だ。

そんな隼人に、晃星はさらに続けた...

2005年3月。

その時、晃星は12歳の小学6年生、実緒梨は10歳の小学4年生。二人は、2つ歳の離れた兄妹だった。

幼い頃からずっと、二人は仲良しの兄妹として、近所でも、また仲間たちのあいだでも知られていた。快活な兄の晃星は、実緒梨の面倒を良く見てやり、放課後や休日にやっていた野球の練習や試合の時も、連れて歩いていた。実緒梨が友達に泣かされたと聞いたら、その子の家まで一緒に行って、自分のことのように怒った。

引っ込み思案な実緒梨は、そんな兄の晃星を頼りにして、いつも嬉しそうについて歩いていた。

しかし、晃星が小学生の高学年になった頃から、そんな関係が少しずつ変わり始めていた。いつも妹を連れて歩いていること

を友人にからかわれたりするうち、つい、実緒梨を疎ましく感じ、冷たくすることが増えてきたのだ。

決して、実緒梨を嫌いになったとか、そういうことではない。妹に対して、絵に描いたような優しさを見せることへのためらい。それは誰でも通り過ぎる、思春期の複雑な感情だった。

しかし実緒梨にとっては、優しかった兄が少しずつ離れていくようで寂しい。それでつい、晃星の気をひこうとして色々世話を焼こうとし、それがまた、晃星には鬱陶しく感じられてしまうのだった。

ある日のこと。

一人で野球に出かけた晃星。実緒梨は連れて行ってもらえない。

せめて、帰ってきたときに晃星に喜んでもらいたい。実緒梨はそんな気持ちで晃星の部屋を掃除していた。

ふと、床に置かれた漫画本につまづき、机の角に手をついた。

“ガチャン”

鈍い音に、実緒梨ははっとなった。

振動で、机の上の棚に置かれていたプラモデルのロボットが落下し、腕が取れてしまったのだ。

「どうしよう...」

誕生日に祖父からもらったそのプラモデルを、晃星がどれだけ気に入っていたか、そして完成させるのに、どれだけ苦労していたかを聞いていた実緒梨は、大変なことをしてしまったという思いで、その場に座り込んだ。

野球から帰った晃星に、素直に謝ろうと

する実緒梨。

「お兄ちゃん、ごめんなさい...」

言い終わらないうちに、晃星の拳骨が実緒梨の頭に降り注ぐ。

晃星が実緒梨に手を上げることは、物心ついてからはほとんど無いことだった。大好きな兄を怒らせたという悲しみと、これまでにない痛みで、実緒梨の目から大粒の涙がこぼれる。

「悪気があったわけじゃないし、もう許してあげなさいよ。ちょっと修理したら直るんでしょう？」

母親のそんなフォローも聞く耳を持たない晃星は、激しい怒りの表情のまま、実緒梨に言い放った。

「もう、絶対部屋に入ってくるなよ!!」

その翌日の夕方。

雨の新佐倉駅ホーム。電車を待つ晃星と、少し離れて立つ実緒梨。

毎週水曜日と金曜日、二人は学校が終わってから、隣町にある塾へ行くようになっていた。同じ塾だが、4年生と6年生では時間帯が若干異なり、6年生の方が15分早く始まり、また早く終わる。

母親は晃星に、いつも実緒梨を連れて行くように言っていたが、晃星にとってはこれも友人たちから色々からかわれて、そろそろ嫌になっていたところだった。

特にこの日は、前日のプラモデルのこともあり、晃星の不機嫌さはいつもにも増して高まっていた。

塾の授業は4年生、6年生とも予定通り始まり、そして予定通り終わった。

先に終わった6年生のクラスで、晃星に友人が声をかける。

「おい晃星、駅前のゲーセンに新しいの

が入ったぞ、ちょっと見ていかないか」

晃星は一瞬ためらったものの、

「おう、行こう」

そう言って一緒に塾を出ようとする。

「晃星、実緒梨ちゃんはいいいのか？」

別な友人が心配そうに声をかける。

「いいさ、もうあいつも、いい加減一人で帰れるだろ」

15分後、実緒梨の授業が終わって外へ出ると、そこにいつもいるはずの晃星の姿が無い。

「6年生は予定通り終わったよ。晃星君か...そういえば友達と一緒に先に出て行ったよ。どうしたんだろうね今日は」

6年生の講師は、実緒梨にそう答えた。

分かっていた。その日、晃星がなぜ自分を待ってくれなかったか。

「みおちゃん、お兄さん先に帰っちゃったの？」

悲しそうな表情に、心配して友人の鈴菜が声をかける。

「駅まで一緒に帰ろう」

鈴菜に言われてうなづく、実緒梨は雨の中を帰っていった。

鈴菜は反対の方角の電車なので、駅で別れ、実緒梨は一人で新佐倉の駅まで帰ってきた。

ホームを歩いて出口の方へ向かう。

その時、駅の横に隣接するビルの屋上から、一本の銃口がホームに向けられていた。

標的は、ベンチに座っている一人の若い男。

その頃、地元の有力な政治家と、暴力団との癒着が噂になっていた。

男は、その秘密を知り、政治家をゆすっていたのだ。

スナイパーの銃口は、正確にその男の姿を捉え、周りの人波が途切れるのを待っていた。

男の方へ歩いてくる実緒梨。

後方で、二人の男子中学生がふざけ合っている。

そのうちの一人が、もう一人の足をひっかけながら小突いた。

弾みでよろめいた中学生は、前を歩いていた実緒梨の背中にぶつかった。

「きゃっ」

いきなり後から押された実緒梨は、ベンチの男の近くで、前のめりになって倒れる。

人波が切れたと思い、スナイパーにトリガーを引かれた銃の先に、飛び込んできた少女の姿。

何という、残酷で不幸なタイミングだろうか。

事件の真実が外部に出ることはなかった。誰のどんな圧力がかかったのか、晃星は知らない。ただ確かなのは、対外的にはそれが人身事故として扱われた、ということだ。

それが2005年3月11日、激しい雨の夜のことだった。

夕陽に染まった実緒梨の部屋。

小学校の制服や帽子、塾のテキスト、お気に入りだった漫画家のイラスト色紙...

彼女がここにいたときそのまま残された、それらを見つめながら、晃星はひとり、呆然と立ちつくしていた。

ふと、ベッドの上の大きなぬいぐるみに目をやり、手に取る。

緑色の「森の妖精」...それは実緒梨が、行くのをずっと楽しみに待っていた、2005

年愛知万博のキャラクターだった。

「涙が、出なかったんだ」

ぽつりと、晃星が力なく言う。

「実緒梨のいなくなった部屋で、机の上に置かれた花瓶や、あいつの写真を見ても、涙が出なかったんだ。僕のせいじゃない、あいつが悪いんだって、そんなことばかり心の中で繰り返すつづやいて...

バカな、本当にどうしようもない、バカな子供だったよ...あんたも、確か前に言っていたよなあ」

「えっ」

「ほら、昔の話は照れくさいというより、本当に情けないって。なんであんなことしてしまったんだらう、なんであんな子供だったんだらうって、全くそのとおりさ。

自分のやったことの愚かさ気づいて、僕が本当にあいつのために泣いたのは、もう少し時間が経って、大人の考え方ができるようになってからだった。

どうして、待ってやれなかったんだらう。一緒にいてやらなかったんだらう...せめて、最後の瞬間まで、一緒にいてやれたら...

僕は、恋愛も結婚もしないって決めた。自分だけが幸せになる訳にはいかない。それが、せめてもの償いのつもりだった」

「そんな...」

兄妹げんかなんて、どこの家庭にだってあるじゃないか。ほんの些細なことだと分かっている、つい意地を張ってしまうことだってあるじゃないか。大人気ないって、当たり前じゃないか、子供なんだから。

そう叫びそうになる気持ちを、隼人はぐっとこらえた。そんなこと、誰に言われなくても当然、晃星自身が一番分かっている。そう、分かっているなあ、自分を許せ

ないのだ。

「タイムマシンが実用化されて、それがバスという形で一般に供用されるようになったとき、僕が真っ先に思ったのは、“実緒梨に会いたい”ってことだった。会って話をしたいとか、謝りたいとかじゃなくて、ただ、物陰から少しだけ、元気な頃の姿を見られるだけでいい。

僕はそれまでの勤めをやめて、時空乗合の運転手になった。これでいつでも、あいつが生きていた時代に戻ることができる。

でも実際はできなかった。いざとなると、なんだか怖くなった。あいつが生きている時代に何度も戻ったのに、姿を見に行く勇気がなかった。きっとあいつは、僕のことを恨んでいるだろうとか、そんなことばかり考えた。そうこうしているうちに、もう定年だよ」

淡々と語られる重い告白を、黙って聞いている隼人。そこでふと、新たな疑問が浮かび上がった。

晃星の話が事実だとしたら、さっきまで一緒に遊んでいた、目の前のバスの中で眠っている実緒梨はいったい...

その答えは、続けて晃星の口からもたらされた。

「そんなわけで、気を悪くしないで欲しいんだが、いまここにいる実緒梨は、もちろん本物の実緒梨じゃない...つまり、人間じゃない...コピーロボットなんだ」

「ああ...」

当初の予想が当たってしまったわけだが、できれば当たらないままでいて欲しかった、と隼人は思う。

未来は何て便利なんだろう。タイムマシンの次はコピーロボット。いま、自分たちが生きている世界の延長に、本当にそんな夢のような時代が来るのだろうか。隼人は

変なところで感心した。

「もともとは介護用で、離れて暮らしていたりで、肉親の世話をしたくてもできない家族がレンタルするために開発されたものなんだ。顔や体形、声や性格といった情報に基づいて、かなり近いところまで再現できる。最近は何みたいに、突然の事故や病気で失った家族に、ちゃんとお別れの言葉を言いたいから、という理由での利用も多いらしいよ。

ただ、いずれにしても人道上の理由で、一人あたりのレンタル期間は上限一年ということになっているんだけどね」

定年を間近にしても、本物の実緒梨に会いに行く勇気がないなら、せめてと思いついて晃星は、最後の一年にコピーロボットであの頃の実緒梨の姿を再現してもらうことにした、という訳だ。これを思い出にして、全て忘れて、この仕事を終えるつもりだったのだ。

「ロボットなんだから、いくらでも自分に都合のいいように、兄貴に懐くかわいい妹にしようと思えばできた。でも、最後に試したかったんだ、当時のままの設定にして、それでもあいつが許してくれるかどうか。結果は見てのとおりさ。結局、自分の力じゃ、あいつの笑顔を取り戻せなかったよ」

涙をこらえ、天を見上げる角度に顔を上げて、晃星は話し続ける。

「でも、これで決心がついたよ。僕が最後にすべきことの決心が」

「えっ」

「自分の手で、実緒梨の人生を取り戻す。あの日、あの場所に戻って、僕の手であいつを守ってやるんだ。タイムトリップするバスの運転手になった僕の、これが本当に最後の仕事だ。僕があいつにしてやれる、

最後の…」

「晃星さん、あなたまさか」

晃星の考えていることを察し、隼人は声をあげた。

「そんなことしたら、今度は」

興奮して、思わず立ち上がって晃星を見下ろす姿勢で、隼人は続けた。

「その時は良くて、ずっとずっと大人になったその時に、実緒梨ちゃんが悲しむことになるのは、同じじゃないですか」

「そうかもしれん。でも、それしかないんだ。それは、僕がやらなきゃならないんだ。今、それができるのは、僕しかいないんだから」

ゆっくりと、でも力を込めてそう言う晃星に、隼人は何も返せなかった。

長く、深い後悔の日々の末にたどりついたであろう、晃星の結論。

その結論への「同情」ではなく「共感」が、隼人を黙らせた。

時空トンネルを、2005 年に向かって走るバス。

あの日、仕事帰りに電車が止まった、あれは人身事故じゃなく、本当はこんなことがあったなんて。

そして、それをきっかけに、俺は実緒梨ちゃんに出会った…何とも不思議な話だ。

その実緒梨は相変わらず、おだやかな寝顔のままだ。

「これがロボット、作り物なのか」

こんなことまでできてしまうなんて、まったく、技術の進歩は本当に素晴らしい。でもちょっと残酷な時もあるなあ…隼人はそんなふうに思う。

でも。

折鶴を見たときの嬉しそうな表情、手を

つないだ温もり、黄身がちょっと固めの目玉焼きの味...

どれも、間違いなく本物だった。

実体はロボットかもしれないが、ここにいるのはやっぱり、実緒梨そのものなのだ。

この笑顔を、守りたい。

もう一度、この兄妹の幸せな日々を取り戻すことはできないのだろうか。タイムマシンやコピーロボットを作れる未来の世界でも、こればかりは無理なのか。

前回の時と同じように、バスは隼人のマンションに近い、夜の住宅街の公園にたどり着いた。

「隼人お兄さん、今日はありがとう...あの...また遊んでね」

にこにこしながら手を振る実緒梨。

「ああ」

悟られないようにと、作り笑顔で応じる隼人。

「ありがとうな」

運転席の横を過ぎて、降車ドアから出ようとする隼人に、晃星はじっと前を向いたまま、目を合わさないで言った。

「晃星さん...」

最後まで、彼の決意をどうにかする術を考えながら、ついにもできない自分のもどかしさに、言葉にできない苛立ちを感じながら、隼人はバスを降りた。

ボタンとドアが閉まり、バスが走り出す。

「さようなら」

嬉しそうに隼人を見ている実緒梨に、力無く手を振る。

「これで良かったのか...」

良いはずがない。しかしだからと言ってどうすればいいのか、自分に何ができるのか。

去っていくバスが角を曲がり、見えなくなる。

と、ほぼ同時に、反対側から近づいてきた車のライトが、キキーツというブレーキとともに隼人の目の前で止まった。

パトカーだ。しかも、この古びた車のデザインは...

時空警察だ。

以前、時空トンネル内で遭遇した、あの時と同じ警官、そして今日は別な私服刑事らしき人物もいっしょに、車から降りてきて隼人に近づく。

「あなた、時空乗合 908 系統に乗っていた方ですね」

無言で頷く隼人。

「あのバスが、タイムトリップ事業のルールを破った違法営業をしているという情報が、複数寄せられています。何か知っていることがあったら、隠さず教えていただけませんか。ご協力いただけないと、あなたにもご迷惑がかかる場合が...」

丁寧だが、厳しい口調で隼人に接する刑事。

次の瞬間、きりっとした表情で刑事の目をしっかりと見つめながら、隼人は言った。

「刑事さんの言うとおり、あのバスは違法な営業をしています。自分は、あのバスが次に目指す場所の見当がついています。案内しますよ」

「ご理解、ご協力に感謝します」

そう言うと刑事は、隼人をパトカーの後部座席へ乗るよう促した。

時空トンネルを抜け、バスはまた、何度か来たことのある夜の幹線道を走っていた。

激しい雨が続く。やがて市街地に入り、美術館の大きな駐車場にバスは止まった。

すでに閉館時間を過ぎ、建物の明かりも消え、静かな空間。

エンジンを切りサイドブレーキをかけると、晃星は実緒梨に言った。

「ここで、ちょっと待ってて」

そう言って一人バスを降りようとした時、実緒梨が黙って、晃星の上着の裾をつかんだ。

振り返る晃星に、

「早く、帰ってきてね」

ぽつんとつぶやく実緒梨。

晃星は思わず床にひざをつき、実緒梨をぎゅっと抱きしめた。

「ごめんな、実緒梨...ずっと寂しい思いをさせてしまったな...バカな兄貴を許してはもらえないのは分かってるよ。こんな事しかできないんだ。だから、今、助けてやるからな」

そのまま、実緒梨の顔は見ず、急いでバスを降りる。

その時、

一台の車が猛スピードで近づいてくると、激しいブレーキとともに晃星の目の前に止まった。

時空警察のパトカーだ。

あわただしく降りてきた警官が、両脇から晃星を取り押さえる。

「タイムトリップ事業に関する違法営業の疑いで、署まで来て話を聞かせていただきたい」

そう言う刑事の後に出てきたのは隼人だ。

「君、どうして」

驚く晃星に、隼人は答えた。

「やっぱりこの時間、駅の近くで目立たずに大型車を置ける広いスペースといたら、多分ここだと思ったよ」

そして、

「後は俺に任せて!!」

言うと、隼人は警官の脇をすり抜け、雨の中を傘もささず一目散に駆け出した。

「こら、待たんか!!」

一人の警官が隼人を追って走り出す。

「隼人君...」

あっという間のそんな出来事を、晃星も実緒梨も、啞然とした表情で見つめていた。

が、すぐに晃星は、追って走った警官に向かって言った。

「早く彼を、隼人君をつかまえてくれ!! でないと、彼は...」

走る隼人と、追う警官の距離が徐々に縮まる。

しかし、ここはなんといっても隼人の地元だ。駅が近づくにつれ、昔からの街並みで細い路地がたくさんある。まんまと警官をまき、新佐倉駅前広場に飛び出した。

ちらっと腕時計を見る。もう、あまり時間がない。

「間に合え、間に合え」

心の中で念じるようにつぶやきながら、改札に飛び込む。

「おい、君!!」

駅員の制止も無視し、ホームに駆け込む。突然現れたずぶ濡れの男の姿に驚く乗客たち。

かまわずホームを見渡し、実緒梨を探す。

「いた!!」

とぼとぼと歩く実緒梨の姿が見えた。そしてその近くで、ふざけ合っている中学生。隼人は走った。

「間に合え、間に合え」

小突かれてよろめいた中学生の体が、実緒梨の背に当たる。

前のめりになる実緒梨。

その胸のあたりへ飛び込む隼人。



人ごみの中、はっきりと顔を合わせてはいないが、隼人の両手に、小さな体を押し戻す感触が、確かに伝わった。

次の瞬間、激しい衝撃と鈍い金属音が隼人を襲う。

...遠くに、悲鳴とどよめきが聞こえた、そんな気がした。

ここは、どこだろう。

ドライアイスのような白い煙が足元を覆いつくしている広い空間を、隼人は一人歩いていた。

ゆっくり、淡々と機械的に歩いていく。何かに取りつかれているような違和感はない。むしろ、満足感、達成感のようなものが、彼の足取りを軽やかにしていた。

「お兄さん、隼人お兄さん」

呼ばれて振り向くと、そこには実緒梨がぼつんと立っていた。

「ああ、実緒梨ちゃん」

笑顔で呼びかける。

「どこへ行くの？」

不安そうな実緒梨に、隼人は変わらない優しい笑顔で答えた。

「うーん、分からないけど、なんだかとても落ち着いた気分なんだ。実緒梨ちゃんは何も心配しなくてもいいよ」

「お兄さんも、いなくなるの？」

「え？」

「みんな、わたしの前からいなくなるの...また、お兄さんもいなくなるの?...みんな、わたしのことが嫌いななの？」

力ない声で訴える。

ああ、そうか。

実緒梨が死んだということ、それは周りの者からみれば彼女の存在が消えたということだが、彼女の側にしてみれば、周りの

者が自分の前から消えたという感覚なのか。

隼人は振り返って実緒梨の前まで歩み寄ると、ひざを地面につく姿勢で視線を下ろし、実緒梨の両肩に手を置いて、励ますように言った。

「君には、晃星お兄ちゃんがいるじゃないか。彼はとっても妹思いの素敵なお兄ちゃんだよ。けんかすることもあるだろうけど、君のことが本当に嫌いだったり、憎かったりするわけじゃない。うーん、そうだな...ちょっと、照れくさいだけさ」

「照れくさいの？」

「そう。男ってのはバカだから、つい意地張ったりするんだよ。晃星お兄ちゃんだってそうさ。

でも、本当は..君のことが大好きなんだ。だからずっとずっと、君のことだけを想って、今日まで過ごしてきたんだ。ほんの少し、冷たく当たってしまったことを、心から後悔しているんだ。

兄妹げんかなんて、誰だってするよ。君たちは、それが不幸なタイミングと重なってしまった。でもすぐに仲直りできるよ。だからもう一度あの時に戻って、ちゃんと仲直りして、これからの自分の人生を歩いていくんだ...ああ、そういうことだったのか」

次第に、大きな瞳を涙でいっぱいにしていく実緒梨の前で、隼人は何かに気づいたように立ち上がった。

「あの日、本当は出会うはずのなかった俺と、君たちのバスが出会ったのは、きつとこうするためだったんだ。ずっと思ってたんだ、これはただの偶然じゃない。俺がこのバスに乗ったのには、何か意味があるはずだって。

この二人の兄妹の未来を取り戻せるのは、自分しかいないんだってことだったんだ」

「分からないよ、隼人お兄さん...何言ってるのか分からないよ」

涙目で見上げる実緒梨に、なお優しい口調で続けた。

「いいんだよ、俺の言っていることなんて何も分からなくなつて。これで君も、晃星お兄ちゃんも、一度は失ってしまった未来を取り戻すことができる。また自分の足で、自分の人生を歩いていくことができるようになる。それでいいんだ。

俺がこうすることで、君たちはもう未来の世界でバスに乗ってタイムスリップする理由もなくなる。だから新しい君たちの人生では、もう俺に出会うことはない。何も気にすることはない。それでいいんだよ。

ただ、実緒梨ちゃん、一つだけ俺に約束してくれるかい？」

もう一度、隼人はひざをついて実緒梨と目線を合わせると、大切なことを伝えるように、力をこめて言った。

「幸せ、つかめよ!」

やがて、泣き顔のままの実緒梨が、視界からゆっくりと消えていった。

夜明け前の、まだ薄暗い街。新聞配達のパイクの音だけが周囲に響く。

マンションの自室のベッド上で、隼人は前夜の帰宅時のスーツ姿のまま、浅い眠りから覚めないでいた。

机の上には、コンビニ弁当の空き箱と、飲みかけの缶ビール。

つけっ放しのテレビが、早朝のニュースを流している。

「北都電鉄本線は11日午後8時頃、新佐倉駅で発生した人身事故の影響により、全線で運転を見合わせていましたが、12日は始発から平常どおり運転しています。な

お、事故の犠牲となった男性は、年齢20歳から30歳くらいで中肉中背、現在のところ身元が判明しておらず、警察では家出人の捜索願いや、行方不明者リストとの照会を急ぎ...」

昨夜の大雨は幸い一段落したようだ。曇り空の下、隼人は職場へ向かうべく、新佐倉駅のホームに立っていた。

「それにしても大変だったなあ」

昨日はここで人身事故があり、電車がストップしてしまったため、大雨の中を代行バスの列に30分近く並び、さらに乗ったバスも渋滞で思うようには走れず、普通なら電車と徒歩で20分のところを、1時間半近くかかって帰っていたのだった。遅い夕食をとり、そのまま疲れて風呂にも入らず寝てしまったので、どうもすっきりしない。

今日は土曜日なので全体的にいくぶん空いているが、それでも頻繁に電車が走り、大勢の人が行き来する、そんないつもと同じ風景。

やがて都心へ向かう電車が到着し、わずかな停車時間ののち、隼人たちを乗せて発車していったその後、しばらくして反対側のホームへの階段を上がってきた、小学校の制服姿の兄妹の姿があった。

実緒梨と晃星。

彼女は、助かったのだ。

...新佐倉駅のホームで、実緒梨をかばって撃たれたのは、数日後の未来から戻ってきた隼人だった。しかし、実緒梨が助かったことで彼女の歴史は変わり、晃星の歴史も変わった。もう晃星が時空乗合の運転手になることはない。そしてその時間、まだ会社にいた隼人も、晃星・実緒梨と出会うことはなくなったわけだ。

何も知らないまま、隼人は代行バスに乗って帰った。そしてこれからも、変わらない生活を続けていくことだろう。

これまでの物語で描かれてきた世界の隼人...実緒梨が凶弾に倒れた同じ日に、偶然、時空乗合に遭遇して晃星たちと出会い、そして撃たれた...は、こうして歴史の流れの中に消えてしまった。

犠牲者の姿がいつの間にか忽然と消えたことは、警察や病院関係者の間で大きな騒ぎとなっていたが、もちろんそれが外部に知らされることは無かった。

一方、無事だった実緒梨は、急いで帰宅すると、目の前で男が銃弾に倒れるのを見たショックで泣き出し、母親の胸に飛び込んだ。

事情を聞き、さぞ怖かっただろう、と父親も心配する中、ひとり兄の晃星だけが、相変わらずぶいといと横を向いたままだった。

「だめじゃない、ちゃんといつも、一緒に帰るようになってるでしょう」

そう母親に注意されても、プラモデルの恨みが消えない晃星は聞かない。それどころか、泣き顔の実緒梨に、嫌味たっぷりの口調で追い討ちをかけた。

「おまえが撃たれればよかったんだよ」

次の瞬間、

“バシッ”

刑事ドラマで犯人が殴られるときのような、鈍い音と激痛が晃星を襲った。

父親の拳骨だった。

いつもは温厚で、間違いを注意するときもあくまで優しく諭すように言って聞かせる父親。その彼が、まさに吹っ飛ばす勢いで晃星を殴りつけた。

「言っていることと、いけないことの区

別が、そろそろついてもいい年齢じゃないのか、晃星」

これまでに見たことも無い鬼の形相でにらみつける父親の姿に、実緒梨も泣き止み、啞然としていた。

翌朝になっても、晃星の頬にはうっすらと赤い痣が残っている。

「だいじょうぶ？」

心配する実緒梨に、

「うるさい」

としか答えない晃星。

二人が仲直りするには、まだ少々時間がかかりそうだ。

でも大丈夫。彼らには、そのための時間の余裕がたっぷりあるのだから。

歴史は、ゆがめられたのではない。

ただ、元々あった道に戻っただけのことだ。

## AND THEN

早朝から照りつける太陽の光が、半袖の腕に痛いぐらいの真夏。

ラッシュのピークを過ぎた頃。隼人は今日も新佐倉駅前にいた。

ショッピングセンターの壁面に設けられた、電光掲示板にニュースが流れる。

「愛知県で開催中の愛・地球博には、この連休も多数の人が訪れ、特に7月17日は開幕以来最多の21万5,976人が入場し、1日の入場者数で初めて20万人を超えました...」

この日、隼人が目指しているのはいつもと同じ電車のホームではなく、駅前にある路線バスターミナルだ。

同僚が病気で休んでいるため、その同僚の担当の得意先へ、今日は隼人が出向くことになった。その会社が新佐倉からバスに乗っていく場所にあることと、訪問時間の関係で、今日は入社前に自宅から直接、その得意先へ行くことになっていたのだ。

“フォオン”

やがて、既に十数人の乗客たちが列を作って待つ乗り場に、バスが到着した。

隼人は中央のドアから乗り込むと、整理券を取り、窓際の席について缶コーヒーのふたを開けた。

バスの車内は、買い物や通院の手段として利用する人たちで、さらっと座席が埋まるほどの混み具合だ。

ふと外に目をやると、中学校の制服姿の男の子と、10歳ぐらいの女の子が、バス乗り場に近づいてくのが見える。

「夏休みだからなあ」

女の子はノースリーブのワンピースに、

手にはバッグ。旅行にでも行くのだろうか。

そういえば、このバスは駅前から出る複数の系統のうち、もっとも長距離の路線だ。自分が降りる停留所までは20分くらいで着くはずだが、バスはさらにビジネス街やショッピングセンター、病院などのある市街地を抜け、大きな川に沿って、県境の山のふもとにある温泉地まで、約1時間半で走る。

二人はバスに乗り込んでくると、空席を探しながら隼人の横まで来た。

「ほら、ここ空いてる」

男の子の方がそう言って、女の子に着席するよう促す。

女の子は隼人にちょこんと頭を下げると、隣の席に座った。

バッグは足下に置き、肩にかけていた小さなポシェットをひざの上に載せた。

「おばあちゃん家、お正月にも行ったから覚えているだろ。終点のふたつ前の「登山口」っていうバス停で降りたら、あとは一本道だから。僕はどうしても今日はクラブがあるから無理だけど、明日には行くから」

男の子の言葉に、女の子は無言で頷く。

そして男の子は今度は隼人の方を向くと、

「すみません、こいつ、僕の妹なんですけど、今日はひとりなので、もし何かあったら、お世話かけますがよろしく願いします」

「あ、はい」

しっかりした、妹思いのいいお兄さんだ。隼人は感心して答えた。

そのまま、女の子の方にも向いて笑顔を

見せたが、彼女は恥ずかしいのか、少し下を向いたままだ。

「まもなく発車します」

時間になった。運転手の声に、兄の方は降りていく。

程なく、ブザー音とともに折りたたみ式の乗車ドアが閉まり、バスは動き出した。

そのままロータリーから街路に出ようとした時、

「おーい、待ってくれい」

斜め前方から、乗り遅れたらしい中年男性が走ってくると、バスの前に飛び出して両手を大きく振った。

“キキーッ”

運転手はあわててブレーキを踏む。

「きゃっ!!」

驚いた女の子は、はずみで横の隼人の右腕に、両手でしがみついた。

ひざの上に置いていた彼女のポシェットが床に落ちた。紐に付けられた、愛知万博のキャラクターのキーホルダーとネームタグ。そのネームタグには“虹宮実緒梨”の名前。

目を合わせる二人。

「大丈夫だよ」

安心させるように優しく、隼人はその女の子...実緒梨に言いながら、落ちたポシェットを拾うと、しがみついた手に自分の手を重ねた。

ほっとして、大きな瞳で隼人を見つめながら、恥ずかしそうに、

「...ありがとうございます」

にっこり微笑む彼女。

「いや、皆さん申し訳ないね」

困ったなあという顔の運転手を横目に、バスを止めた男は悪びれた様子もなく、汗をふきふき乗ってきた。

あらためてドアが閉まり、バスが動き出

す。

「おばあちゃんの家へ遊びに行くの?」

隼人は実緒梨に声をかけた。

「はい」

照れた笑顔で頷く実緒梨。

「夏休みだからね、楽しみだね」

“フォオン”

二人を乗せたバスは、眩しい朝の陽射しを浴びて、街路樹の並ぶ大通りをまっすぐに走っていった。

THE END.